

視点・論点・ところてん

「9.19を忘れない。 今、私たちにできること」(後)

先月号では、安保法案の問題点について編集部としての見解を述べた。今、私たち今できることは何か。11月5日に私たちは編集部座談会を企画した。その中で出た意見をまとめる形で、大阪支部編集部としての見解を述べたいと思う。

学校教育で必要な視点

まず、はっきり、運動と教育は分けたほうがいい。「戦争の悲惨さを伝える」というが、それだけでは平和教育はなりたない。「だからだめなんだ」と価値観を押しつけるだけの授業は、子どもにしたら「おもしろくない」「暗い」と感じるだけになりがちだ。

教育はやはり科学性が大事である。そこをちゃんと踏まえたうえで何をおろすか。学年にもよる。はっきり言えることは「戦争をしたら人が死ぬ」ということだ。「なんでこんなにたくさん人が死ぬのに戦争をするのか」ということが一番考えなければならぬところである。子どもはこの部分にきちんと向き合わせる必要がある。

価値観を押しつけるだけではなく、真理を見つめる目を育て、「真実をあなたの目で見てください、考えてください」というような形で伝えるのが一つの方法ではないだろうか。

多様な価値観にあふれる現代社会

世の中にはいろいろな価値観が存在する。(同僚で)アフリカから帰ってきた教員がいる。アフリカではほとんどの人が日本の憲法9条のことを知っている。日本人以上に知っている。そして「だから日本はすばらしい」と言っている。「憲法9条があって、戦争をしないと宣言している国だから」だそうである。

だが、今日本で起こっていることは逆で、例えば青年会議所が憲法改正についてどんな事業をしたらいいか盛り込んでくる。また、郷土意識醸成プログラムをtossと組んでやっている。出前授業として。実はそういうものが着々と進行している。逆偏向教育、道徳の教科化よりも足が速いのではないかと心

配している。

自由な発言ができない、授業時間は（外注授業に）取られる。一方、それが「楽でいい」と思う教師もいる。経験主義で勉強しない教員も増えているのではないだろうか。

安保法案に賛成している人も少なくない。新自由主義社会も否定しない。企業で働いている人で中国や外国に行くことがある人は現実問題、危険を感じている。「憲法 9 条があるから日本はなめられている」という発想である。

学び、つながり、真理を求める

SEALDs をはじめ、若い世代からの発信が増えている。「教え子を再び戦争に送らない」と誓った教師のほうが感度が低いという動きが遅い側面はないだろうか。

5 年前に中河内支部研究大会で石川康宏さんと呼んだ時、若手同僚と一緒に聞いてくれ、「やっぱ考えなあかな〜」とは言ってくれたが、5 年たったら忙しさにまぎれて音信不通になってしまった。一緒に活動するには、まずはともに勉強する時間が必要だと思う。同志会であれば、同じ思いの人が集まるから勉強しやすいが、学校や地域を巻き込むには元気がなければかなりしんどいと思う。

教師の多忙化の問題もある。これも「教師に考える暇を与えない」政策の一つなのかもしれない。SEALDs はポップでロック。ラップみたいでいい。どうやったら人の心がかめるかわかっている。同僚もいきたいと思って

いるが時間がない。能書きだけで動かない教師が多い中、SEALDs の感性は高い。

今の世の中、手軽にネットで情報が手に入る。すなわち、そまりやすい情報が氾濫し、なにを信じていいかわからない状態になっている。その中で子どもに対し自分ができること、真実を探す力（教師も子どもも）真実は一つではないが真実について熟考する力が大事ではないか。教師も自分の思う真実や科学性を子どもに提供していく必要がある。普段からていねいにそういうことを続ける実践をしていきたい。

私たちにできることは、「今、こうやって子どもたちに何を教えるかを考える真摯な姿勢」を貫くことではないか。外注の出前授業（携帯の使い方とか、薬物乱用とか）は子どもに必要な内容も多いが、教育内容は自前で作りあげて大切にしたい。教師自身の目標や育てたい力が実行しきれないのでは本末転倒だ。「これは譲れない」という中身を教師が持ち、1 年に 1 個でも自分のこだわり実践をし、「文化」や「科学」を追及し「わかってできて学びあう」授業づくりを続けることが、今、私たちにできる一番身近な取り組みではないだろうか。

折りしも「9・19」が「イケンの日」と日本記念日協会により名づけられた。「意見」「違憲」「異見」三つの意味が含まれている。多様な価値観の中から異見を出し合い、異見を越えてつながりあうことが求められている。（文責：辻内）

